

八戸市における子どものおそびとその変容

中 谷 喜 久 子



八戸市の地理的、風土的環境

私どもの住んでいる青森県は東北地方の北の端にあり「みちのく」と呼ばれている。昔は「陸奥」といわれていたように中央から非常に遠い存在で、交通や気候に恵まれない東北の辺地・文化の果つる地とされていた。青森県の東南にある八戸市は今日でこそ人口二十一万、新産業都市にも指定され、水揚げ全国一、二位を競っている八戸港を持ち、工業の町・漁業の町として知られるようになったのであるが、しかし、

・江戸時代に盛岡南部氏十万石のうち二万石を分け与えられ八戸藩ができた

・明治四年、廢藩置県により八戸県となった

・明治二十三年、八戸町となった

・昭和四年、市制になった頃は人口五万

という、昔は小さな静かな城下町だったらしい。

わが国の一般的な気候に比べると、冷涼で短い夏、寒気の厳しく長い冬であり、冷害による大凶作に見舞われたことがたびたびあった。子どもの頃よく「南部の殿さまアワめしヒエめし、のーどにひっからまーるほしなじるほしなじる」と意味もわからずにと歌ったものであったが、今になってよく考えると極端に貧しいくらしをしていた八戸地方の人々（南部人）を揶揄したことであったことがよくわかる。昭和十一年頃も子どもたちは男の子はつそでの着物を着て、女の子は縞や矢がすりの着物を着、げたやぞうりをはいて小学校へいっていたということである。

古くからの町ではあったが、八戸弁は今日では工業の発達に伴う人口の増加とテレビの普及とともに姿を消しつつある。子どもたちに八戸弁で何かいうとおかしいといって笑ったり、意味が通じなかったりすることが多い。遊びにしても八戸弁と同様に次々

と忘れられていき、全国的に同じことば、同じ遊び方のものが多くなってきたように思われるのである。

四月 からっ風が砂ぼこりを舞い上げる。

梅と桃と桜がいっしょに咲いて四月下旬からお花見のシーズンとなる。

八月 平均気温二十二度、旧盆の頃から秋風が吹きはじめる。

十月 秋が短くお彼岸が過ぎると寒くなる。

二月 平均気温マイナス一度、雪は少なく乾燥し、海からの冷たい風が吹きつけ、いわゆるシバレル(凍る)日が続く。

このような八戸の町において二十年前の子どものあそび(五、六歳から小学六年頃までに遊んだ)が現在ではどのように保存されるように変容されてきているか、またその原因について調べてみることにした。

方法

①筆者が子どもの頃に(昭和二十年～二十七年)遊んだあそびをできるだけ思い出して、その呼名・遊び方・遊びに伴う歌・ことば等をあげ(イロハ……)その一つ一つについて②現在中学三年生、女三名に彼女たちが子どもの頃(昭和三十五年～四十一年)に、イロハについてはどうだったか、また遊び仲間について、遊び場所について聞く。次に③現在小学三、四、五年生男一、女八のグループに同じように、加えてどんな遊びをしているかを聞

く。④幼稚園年長児(六〇名)の自然発生的あそびの中にイロハ……について調べ、保育者が保育にとり上げているとすればその目的や方法について、⑤八戸地方では冬二月になると豊年を祈って郷土芸能である無形文化財指定の「えんぶり」祭りはじまるのであるが、このお祭りに対する子どもたちの興味や関心のようなものを①～④について調べることにした。

① 昭和二十年～二十七年頃の子どもの遊び

イ おはじき

ガラス製で、透明なものと乳白色模様入りのものがあつた。

ロ だまっこ(お手玉のこと)

まくら玉とはぎ玉の二種類があつた。五コが一組となつていて、その中の自分の気に入りの玉を「親玉」といつた。同じ一組を使って三人で遊んでもそれぞれ親玉の異なることがあつた。

・だまっこあそびのうた

「おひとつ おひとつお二つ お二つお二つお三つ おお三つ
おおみんな おおみんな おってんちよくんな ちよくんな ちよ
うくもはんな はんなもだいやすっこ だいやすっこ だいだいびっ
き びつきもおしやらす おしやらす おしやらすおねがいしよ
おねがいしよ おねもおかいしよ おつかえーし おつかえー
しおつかえもんどし、もーももかーけ ばだばだも一俵 たわら
ん 一俵二俵三俵四俵五俵もつて たわらもうんま ンまも一足

ひとあしたん ふたあしたん みーあしたん、よーあしたん い
ーつもたんたん じじばのっこいよ とつてもとなくとも と
なりのおばさんにいっちょかーした いっちょかーしのおひと
つ」

幼い子やへたな人には、「まねっこ(上にあげた玉を手の甲で
うけてから手のひらにとること)無し」とか、「じじばば(「じ
じばのっこいよ」のところから片手で二個を交互に上に上げて
続ける)無し」といって仲間に入れた。一ちようあがると同じう
たで仕方を覚えて「ちやくちやく」「三つちやくちやく」「左手
で」と続けた、技術の高度さを要求した。

ハ まりつき

・まりつきのうた

1 一文目のいーすけさん いも買いに走ってなかぎとサツサ
二文目のいーすけさん にんじん買いに走ってなかぎとサツサ
三文目のさんすけさん さとう買いに走ってなかぎとサツサ
四文目のよんすけさん 塩買いに走ってなかぎとサツサ
五文目のごんすけさん ごぼう買いに走ってなかぎとサツサ
六文目のろくすけさん ろうそく買いに走ってなかぎとサツサ
七文目のななすけさん なつとう買いに走ってなかぎとサツサ
八文目のはちすけさん ハット買いに走ってなかぎとサツサ
九文目のきゅうすけさん くり買いに走ってなかぎとサツサ
十文目のじゅうすけさん 重箱買いに走ってなかぎとサツサ

一文目ずつつき方がちがった。たとえばグループの中でじょう
ずな人は五文目続き、へたな人は二文目続きなど決めておき、
自分の番でそこまで続くと、その文目以後にカクッテ(まぢがえ
て)も次の順番では続きがやれて、あがる(最後までいくと「あ
がり」といった。その次には、

2 一文目のいーすけさん 一の字が嫌いで 一万一千一百億一斗
一斗一斗まきお倉くらに収とめて二文目にわーたした
二文目のいーすけさん 二の字が嫌いで 二万二千二百億二斗
二斗二斗まきお倉に収めて三文目にわーたした
三文目の三すけさん 三の字が嫌いで 三万三千三百億三斗三
斗三斗まきお倉に収めて四文目にわーたした
四文目の四すけさん 四の字が嫌いで 四万四千四百億四斗四
斗四斗まきお倉に収めて五文目にわーたした
五文目の五すけさん 五の字が嫌いで 五万五千五百億五斗五
斗五斗まきお倉に収めて六文目にわーたした
六文目の六すけさん 六の字が嫌いで 六万六千六百億六斗六
斗六斗まきお倉に収めて七文目にわーたした
七文目の七すけさん 七の字が嫌いで 七万七千七百億七斗七斗
七斗まきお倉に収めて八文目にわーたした
八文目の八すけさん 八の字が嫌いで 八万八千八百億八斗八
斗八斗まきお倉に収めて九文目にわーたした
九文目の九すけさん 九の字が嫌いで 九万九千九百億九斗九

斗九斗まきお倉に収めて十文目にわーたした

十文目の十すけさん 十の字が嫌いで十万十千百億十斗十斗

十斗まきお倉に収めて一文目に渡した

3 一間おき位の間隔で並び、リレー式について渡すうた。

A 「どまいじよまといじよさかтон さいたかтон ひのみがとん とんとこせや とのがみさまは ここはふなばのさかりがとん ひーよ ふーよ みいみがよ いーつむーつ ななやでここのとどう ひとつあなたにかしました はい くれましたおさむらいしはおかぐらはやしで」

「どまいじよまといじよ さかтон さいたかтон」と初めにもどり、いつまでもくり返して歌った。

B 「ぶたさんの 宙がえり 屋根から落ちて 水一升飲んで

おなかはタイコ おしりはラッパ ブカブカ キュッキュツ」

二 なわとび

「ゆうびんやさん おはいんなさい おはいりましたら じゃんけんぼん まけたおかたは おにげなさい」

「大波小波 風吹いた山 郵便配達お困のご用で エッサッサ

さぎ波こいこっばのこ」

「くまさんくまさん手について くまさんくまさんまわれ右 く

まさんくまさん片尾で くまさんくまさんさようなら」

ホ 一段二段（ゴムとび）

ゴムひもを持つ人が、自分の親指と人さし指の幅で地面からひ

ぎ・腰・肩・頭へと一段ずつ高くしていき、みんなはそれを飛びこえたり、大阪とび、さか立ちなどでこえてあそんだ。

へ あやつことり（あやとり）

ト 指あそび

1 お・な・べ・ふ（占って飛ぶ）

相手の手首から肘までの間を「おなべふおなべふ」といいながら左右の親指で交互におさえながら上がっていき肘の関節に、

「お」で止まれば「おとこおなご」（乱暴・きかん坊）

「な」で止まれば「なげつつ」（泣き虫）

「べ」で止まれば「べんきょうか」（頭が良い）

「ふ」で止まれば「ふりょう」（不良）

2 数えうた

一つ二つの赤ちゃんか 三つみかんを飲べすぎて 四つ夜中に

はら痛み 五ついつものお医者さん 六つ向かいの看護婦さん

七つなかなか治らない 八つやっぱり治らない 九つこの子は

もうだめだ 十でどうとう死んじやった

チ 歌つきあそび

1 豆っこ煮だが？（豆が煮えましたか？）

「豆っこにえだが さきげっこにえだが ちゅつとくぐれ」

うたに合わせて二人が向き合って、両手をとり左右にふりながらくるっと背中合わせになる、また歌いながらもとにもどる。

2 とんびとんびまわれ（子とろ子とろ）

「とんび とんびまわれ さかなのほね けーぞ」
どうたいながら「子とろ子とろ」のようにしてあそんだ。

3 石きりますか大ますか(じゃんけんあそび)

「石きりますか(グーを出す) 大ますか(パーを出す)

はさみですか(チョキを出す) ピンピンか(親指を立てる)」

たくさんの方でだんだん速度を早めてうたった。

リ パツパ

切手くらい、画用紙の厚さの紙に絵が色刷りしてあった。数名で何枚かずつ出し合い、机の上に並べて、息を勢いよくパツと吹きかけ、札がひっくり返ったら自分のものとなった。

又 パツタ(メンコ)

パツタとも言った。

北斎ふうの武者絵、有名軍人、まんがの主人公の色刷り。

ル ずぐり(こまの一種)

ちようど鶏卵の形の焼きもので、初めは両手でまわし、すぐ五〇〜六〇センチ長さの少し幅のあるひもで地面とずぐりの接触するあたりをたたきながらまわした。

ヲ 陣とり

たいていは電信柱がお互いの陣となった。

ワ かんからふみ(かくれんぼ)

空かん一コを一定の場所に置いておく、誰かがそれを思いきり

遠くへけって逃げ、かくれる。鬼はその空かんをもとへもどしてからでないで隠れている人を捜しに行けず、また捜しに行っている間に空かんをけられたりもした。

カ かごめかごめ

「かごめかごめかごの中の鳥は いついつではる 夜明けのばんに つるとかめとつーべった うしろの正面だれ」

ヨ かけ声

1 「アー イーキッチ キッチ キッチ」といいながら(じゃんけんぽん)(あいこでしょ)(あいこでしょ)とじゃんけんをした。

2 「エッタ」

鬼ごっこなどで相手をつかまえた時にいった。「我得たり」からきていることばであるらしい。

タ はやしことば

1 「おどごどおなごどちようせんこ あまりちようせば泣がせんこ」

男の子と女の子が仲良くあそんでいるときにはやししてた。

2 「人まねこまね荒屋のきづね穴はってにげろ」 友だちのまねばかりする人にむかっていった。

3 「見つけものかちかち返すごどでぎね」 他人の落とし物を見つけたときにいった。

「ネコババするぞ」 うっかり落としした人をからかった。

4 「はなくそまるめて万金丹 それを喰うやつアあんぼん丹」
鼻をいじっている人に向かっていた。

5 「もち米あひなアせ、うる米あひなアせ」

つかまえたどんぼが指にはさまれたまま卵を産んでいる時に、
「もっともっと産むように」という気持ちをかめていった。

6 「松になれ 杉になれ。松になれ、杉になれ」

線香花火をしている時に必ずとなえた。

レ 雪なげ

ソ そりすべり

ツ かねげたすべり(げたスケート)

かねげた。

齒のないげたの台にスベリガネを取り付け鼻緒やつま革をつけた。スベリガネの幅は一分、二分、三分とあり、幼児は、幅の広いものを取り付けていた。路上の固まった雪の上や凍った雪の上ですべて遊んだ。小走りで勢いをつけてすべり両足をひらいて平行に、あるいは足を前後において滑った跡の線が一本になると上手であった。一定の距離を走り、誰が長くきれいに跡をつけてすべるかを競ったものだった。

ネ コーラスケート(すべりげたスケート)

コーラスケート

朴齒の齒のないようなげたの台に今のスピード靴に取り付けるような高さの鉄製のスベリガネをつけ、太い鼻緒に長いひもで台

と足を固定した。かねげたは主に幼児・低学年・女の子のものでコーラスケートは主に高学年の男の子のものであった。

凍った雪の上ですべった、気温の低い日や夜に道路に水をまいておき、朝とか夕方などにかねげたよりはずとずと速いスピードを出してすべったものだった。

② 昭和三十五年〜四十一年頃

イ おはじき

大いに遊んだ。ガラス製のまるいものと、花型をしたもの。

ロ だまっこ

「お手玉」と呼び、持っている人もいたが、あまり遊ばなかった。「うた」は知らない

ハ まりつき

よく遊んだ。遊び方と遊びの歌は1の短い方を知っていた。3のAは全く知らない。Bは遊んだとのこと。

ニ なわとび

「ゆうびんやさん」「くまさんくまさん」「大波小波」等同じようであった。

ホ ゴムとび 大いに遊んだ。

へ あやつことり 「あやとり」といった。

ト 指あそび

1 お、な、べ、ふは知らず、同じ遊び方で「貧乏・金持」

2 数えうた（一つ二つの赤ちゃん）

同じことばで遊んでいたようだ。

チ 1 「豆っこ煮だか」は知らない。

2 「大根とり」といって同じようにして遊んだ。

3 知らない。

リ 主に男子のみ遊んでいた。

又 主に男の子のみ遊んでいた。

ル 全く知らない。

ヲ 同じ呼名「陣とり」であるが、地面に枠をかくてその内側を

陣とりしていった。

ワ 遊んだ

カ 遊んだ

ヨ 1 「オー エス キ」といった。主に男の子。

女の子は「じゃんけんぽん」といった。

2 「ケタ」「ケッタ」ともいった。

タ はやしことばは4のみ。あとは知らない。

レ 遊んだ。

ソ 遊んだ。

ツ 実物は知っているがあまり遊ばなかった。

ネ 知らない。

③ 昭和三十九年～四十五年頃

イ ガラス製のもの、花型をしたものがあり、よくあそんでいる。

ロ お手玉

うたは全くうたわれない。遊び方は1の簡単な方だけである。

ハ まりつき

1のうたと遊び方のみ、

2・3のA・Bは全く知らない。

ニ なわとび 「大波小波」「ゆうびんやさん」「くまさんくま

さん」など。

ホ ゴムとび 「一段、二段」「英語飛び」「いろはにほへと」

へ あやとり 遊んでいる。ただしむずかしいのはできない。

ト 指あそび 知らない。ただしちがう占い方がある。

○ド・レ・ミ

名前に合わせてド・レ・ミ、ド・レ・ミと教えていく。ドは
独身、レは恋愛、ミは見合い。



名前を親指の方からいい、そのところまで
「天国地獄、てんごくじごく」という。死
んだ後の行先きを占う。

○同じように「けいさつ、どろぼう」

○自分の名前と相手の名前を（または男の子と女の子の名前）

書き出し、母音をしらべ、あいうえおの数字を書きこみ、同

じ数字の多い方が「仲が良い」

チ 数えうた 知っている。

○一つ二つはいいけれど 三つみごとにはげがある 四つよこにもはげがある 五ついっぱいにはげがある 六つむこうにはげがある 七つななめにはげがある 八つやっぱりはげがある 九つここにもはげがある 十でとうとうてらっぱげ(ぜんぶはげの意)

チ 歌つきあそび

1・2・3は知らない。

3と同じ遊び方で、

「じゃんけんほかほかほかいかいどう あいこで あめりか ようろっぱ」

リ バツバ

名刺ほどの大きさの「写真バ」、牛乳びんのふたなどであそんだことがあるが、学校から不潔の理由で禁止になってからは遊ばない。

ヌ バツタ

主に男の子のみ、有名野球選手、まんがの主人公が印刷。

ル ずぐり 知らない。

ヲ 陣とり あまり遊ばない。

ワ かんからぶみ あまり遊ばない。

カ 「かごめかごめ」「ことしのぼたん」「花いちもんめ」「煮たった煮たった」

セッセッセでは「アルプス二万尺」「みかんの花」「汽車」「桃

太郎」「浦島太郎」「茶つみ」

ヨ かけ声

1「オーエッキ」ともいうが、たいていは「じゃんけんぽん」

2「タッチ」という。

タ はやしことば

1〜6全く知らない。直接相手に向かつてはやしたてたりはしない。かげ口やあだ名をいうとのこと。

レ 雪なげ 大いにする。

ソ そりあそび あまりしない。

ツ かねげた 全く知らない。

ネ コーラスケート 全く知らない。

○スケート靴を小学校中学年ではクラスで四十名中五、六人持っている。

高学年ではクラス内の男子がほとんど女子の半数が持っている。

中学生ではクラス内のほとんどが持っているとのこと。

仲間関係

・友だちと遊ぶ方が好きである。

・同年齢の人と遊ぶが、同じクラスの人とはよく遊ぶし、時間が

長い。

・年齢がちがうと、年下は「相手くさい」「泣やすい」ので

年上だと「文句をいわれたりする」から

あまり遊ばないとのこと。

・家にいる時は、

テレビを見る、マンガ本を見る、読物を読む、絵をかく、ファッションノート（ぬりえ）で遊ぶ、リアンを編む、高学年では簡単なあみものをする等（女子）のようである。

八戸弁について

学校では共通語を話すように指導している、遊びに夢中になると八戸弁がでてくる、友だちの間では使っている、しかし八戸弁はきたないことばであり良くないと思う、先生に話す時はきちんとしたことばで言っている、家庭でも八戸弁的な共通語ではあるがあまり苦労しないで話している、とのことであった。

④ 幼稚園年長児では

自然発生的あそびにおいては、

ロ お手玉 時々誰かが持ってくる投げたりとったりして遊ぶ。

歌は全く知らない。

ハ まりつき

1のうたはよくうたってあそんでいる。

2・3のA・Bは知らない。

ニ なわとび

よくとべなくても「ゆうびんやさん」「たわらのねずみ」の歌は知っている。

ホ ゴムとび

○一段、二段。

○いろはにはへとなどをしている。

へ あやとり

あやとりのできる子はほんの少しの女兒のみ。

ト 指あそび

○「つねこさんが階段のぼってこちょこちょ」

2 数えうた 見られない。

チ 1〜3 見られない。

リ パツパ 見られない。

ヌ パツタ 折紙で折って作ったりする。園には玩具類持ち込み

禁止である。

ル ズグリ

ヲ 陣とり 見られない。

ワ かんからふみ 見られない。

○くつかくしをする。

カ 「かごめかごめ」「ことしのぼたん」「煮たった煮だった」

「いべいさんがいも切って」

ヨ かけ声

1 「じゃんけんぽん」

2 「タッチ」

○トランポリンで順番を交代するのに、野球ケンで「ララララ

ラーア ララララー ラーララ ラララ ララララー ア
ウト・セーフ・ヨヨイのヨイ」でジャンケンをして代わるのが
一年ほど続いた。今学期になってからは見られなくなった。
タ はやしことば

1) 6は全く見られない。

。「指切りげんまうそついたら針千本のます」

レ 雪なげ 主に三学期に大にする。

ソ そりすべりはしない、園にそりがないため。

ツ 全くなし。

ネ 全くなし。

。ただし竹スキーであそぶ。

保育にとり入れる場合はほとんど遊びの中であるが、伝承的
なもの、八戸地方独特の遊びという意識ではなしに現在子どもた
ちがあそんでいる遊びをとり上げることがほとんど。

「豆っこ煮だが……」はとても喜こんで年少児も喜こんでするの
で一斉保育の時にたびたびうたってあそぶ。ただし「まめっこに
えだが」と濁っては言わず、また「ちゅっとくぐれ」も「くるっ
とくぐれ」と教師が言い直した。

「とんびとんびまわれ」も好んで遊ぶが、教師自身歌の中に八戸
弁が直接でてくるとこのまま歌っていいかと思ったりもする。

⑤ 「えんぶり祭」について

約八百年ほど前から八戸地方に伝わっている郷土芸能で十八年

前に無形文化財に指定されたものである。馬の頭を象徴したえぼ
しをかぶり（太夫）、太鼓、笛、テビラ金（ペーシンバルに似
ている）をならしのぼりを立てて家々をまわる。二月といえは、
八戸はまだ冬の真最中であるが、新春にあたりこの年の豊年を祈
って寒気を打ちほらい、降る雪の中をえんぶり組がやってくる。

I 私どもの幼い頃には遠くからおはやしの音が聞こえてくると
急いで外に出て、えんぶりのする（おどる）のをいつまでも
見物していたものだった。えんぶりがすっている家の前は道
幅をうずめるような人ばかりだった。

II 中学三年女子三名

関心なし 「あ、やってるな」程度のこと。

III 小学三、四、五年生 女八男一名。

。あまり興味なし

。学校で説明をしてくれるとその時はおもしろいと思う。

。門付けとか近くの家です。ついてもそんなに見たいとは思わ
ないとのこと。

IV 毎年幼稚園では、二月が来てえんぶりの日がやってくるとえ
ぼし作りをする。ペーシンバルやトライアングル、手ぬぐ
いと、まわりにあるものをもってえんぶりのあそびをする。
変容の形とその原因について

I 形、遊びに伴ううた、かけ声、ことばがほとんど失なわれてし

まった。(例ロだまっこ ハまりつき 2・3のA・B ト指あ

そび チの1・2・3 ヨの1・2)

2遊びの仕方がなくなった(例ロの複雑型 ハの1の2)

3遊びそのものがなくなった(例リ、ル、ツ、ネ)

4遊びに伴ううた かけ声、ことばが変わってきた(例トの1

トの2 チの3 カ)

5遊ぶ方法が変わってきた(例ト)

6新しく遊ばれている、うたわれている。(例ホ、ト、チ、カの

ことしのぼたん セッセッセ 煮たった煮たった スケート

サッカー)

7同じように今でも遊んでいる(例ハのB ニ)

原因と思われる事柄

1について 昔から漁業が盛んであり他県との交流のあったこ

と、工業の発展に伴い特に人口が増加し、土地の子どもたちは

影響されて、また共通語への指導のためもあって、ほとんど共

通語を理解し、話していることなどにより、八戸弁がだんだん

姿を消しているからではないだろうか。

2について 昔はグループの中に年齢の幅があり、幼い子は「あ

まちゃっこ」と称して遊びの仲間に入れてもらえた。

近年では同年齢、しかも同じクラスの子と遊ぶことが好まれて

いる。交通ははげしく、外遊びの場所が制限されている等か

ら、遊びの技術、複雑なルールなどの伝承がなされていないの

ではないか。

3について 子どもたちがげたをはかなくなった、道道で遊べな

くなった、スピード靴が普及し始めた。

4について 八戸弁でのものがなくなり、代わって今風なものが

とり入れられるようになった。

5・6について 他地方から移住してきた子どもから教えられ

る、テレビから遊び方をおぼえる等によるものであろう。

7について 共通語でうたわれていたからと思われる。八戸弁で

語られ、八戸弁で歌われ、独自の玩具を持ち、また独特な遊び方

をする、そして長い年月伝えられてきた——そのようなあそびが

「八戸地方の伝統的なあそび」というならば、それはもう姿を消

そうとしている。または新しい遊びに変わってきているといえる

のではないだろうか。

八戸地方における明治時代の遊び、大正時代の頃の遊び、昭和

初期頃との比較ができず、単に筆者の周囲のみの小さな調べであ

ったが、八戸弁が使われなくなり、八戸弁の歌がうたわれなくな

り、独自の玩具が見かけられなくなり、全国的な遊びが多くなっ

てきていることを考えると、伝統的な遊びが失われつつあるとい

っても過言ではないだろう。しかしながら広域にわたる正確な調

査ではないので、まだまだ知られていない古くからのあそびが、

ひっそりと残っていて昔々の八戸人の心を伝えていくにちがいな

い、そう思うものもある。

(八戸小中野幼稚園)